

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

玄人の俺と素人の私      f r o m      モンスターハンター

### 【Nコード】

N 7 2 2 6 M

### 【作者名】

・黒鬼風斗

### 【あらすじ】

「俺」は有名な玄人ハンター。いつものようにポケ村の村長からクエストを受注し、リオレウスを討伐に森丘へとやって来たのだが……そこで見たのはリオレウスの卵を持って逃げ回る素人ハンターの「私」だった。リオレウスを倒すだけで終わる筈が、「私」の登場により「俺」は思わぬ苦戦を強いられることになる。果たして二人はリオレウスの巢食う森丘から無事に帰還することができるのだろうか。

## 第一話（前書き）

某掲示板で投稿していた分です。初めて書いたモンハン二次創作小説なので、突っ込みどころとかあるかとは思いますが、楽しんで読んで頂ければ幸いです。

## 第一話

青く広がる空はどこまでも青く透き通り、風に流されていく雲が時折陽の光を遮る。どこからともなく聞こえてくる小鳥や虫の鳴き声、水のせせらぎ、木々のざわめき。それらはまるでここが戦場であるという事実を忘れさせてくれるかのようで、とても心地が良かった。

だがここは紛れもなく戦場である。……少なくとも、俺にとっては。

一体何分くらいこうしていたんだろう。気が付くと俺は、大地の上に寝転がって、ただ呆然と空を眺めていた。

手足……いや、身体が重い。身体が、まるで自分の身体ではなくなってしまったかのように言うことを聞かない。それでも何とか手を動かし、上半身を持ち上げる。

「痛っ……」

骨が軋むような感覚と共に全身に激痛が走る。恐る恐る視線を下へ向けると、自慢のギザミシリーズが見るも無残な姿に、焦げ焦げになってしまっていた。鎧の胴はもうい接合部を中心に溶けて穴が開き、そこからインナーどころか火傷で醜くなった自分の肌さえ顔を覗かせていた。

深い溜息を吐きながら、腰にぶら提げていたかろうじて無事だった回復薬のボトルの封を空け、そのまま口に運ぶ。……全く、この苦味はいつまで経っても慣れるなんて出来やしない。少しでも気を緩めたら嘔吐感が込み上げてきそうなくらい、かなり苦い。友人のハンターは皆これを美味しそうに飲むのだが……俺には理解できない。多数決で考えると、俺の舌がおかしいんだろう、多分、認めたくはないが。

……全く、ツイてない。何が悲しくてリオレウスの放った火球なんかにはやられなければならないのだ。

全部、あの“阿呆”せいだ。あの“阿呆”さえいなければ……っ！

「くそっ！」

憤りを口に出してみても何も変わらない。どうせなら拳で地面を殴りつけたり地面に刺さっている相棒の斧を思わせる風貌の大剣

<ジャツジメント>を蹴り飛ばしたりしたいところだが、そんな事をして結局は自分が傷付くだけなので、そんな事はしない。拳の怪我が増え、相棒を拾いに行く手間が増えるだけだ。

そういえば、あの“阿呆”はまだ生きているのだろうか。リオレウス相手に“あの装備”だから、恐らく今も逃げ回っているかやられてしまったか、どちらかだろう。俺が多少なり弱らせているとは言え、捕獲できる程弱らせていた訳ではない。

まあ、なんにしろ。

リオレウスを狩りに来た以上、狩るまでは帰れない。

「……生きてると良いがな」

そう一言だけ呟き、ゆっくりと立ち上がると、相棒を背のホルダ―へと収めた。

×××

「うつつつひゃあああああーっ！！！」

自分でも酷くみつともない悲鳴だと分かっちゃいるけど、私の意志とは関係なく、それは自然と私の口から発せられている。でも叫ばずにはられない。

だって。

「ガアアアッ！！」

本でしか見た事もないような、赤い甲殻を見に纏った飛竜が、牙を覗かせる大きな口から火を煙みたいなのを出しながら、私を全速力で追ってきているのだから。

うつん、正確に言う追っているのは私ではなく、私の腕の中の“コレ”。

「勘弁してよお！　こんなのがいるなんて聞いてないってば！！」

時々背後に迫る飛竜　確かりオレウスって名前だっけ　を振り返りながらも、私は前へ前へと全力疾走していた。せつかく手に入れた“飛竜の卵”を落とさないように大事に抱えながら。

“飛竜の卵”は持って帰れば高いお金で買い取ってくれる。楽にお金が稼げるって言われたからここ　森丘に来ただけど、“親”がいるって何で教えてくれなかったのよおー！　いやまあ、卵がある以上、そこに親がいるって必然的な事に気付かなかった私も私だけど……って今はそんな後悔なんてしてる場合じゃないって！

「ひいええええええつ!!!」

またしても私の口から奇声が発せられる。ああ、恥ずかし。

走っても走ってもリオレウスは憤怒に燃えながら追いかけてくる。追いつかれては絶妙なタイミングで方向転換して突進を避けてたんだけど、それももう限界みたい。

いい加減、スタミナが限界だった。足が重く、時々だけ膝が折れて倒れそうになる。リオレウスも私と同じように疲れて諦めてくれないかなあ、とそんな期待を込めてまた後ろを振り返ってみた。

その時だった。

足が、もつれた。

「あっ！」

ドサツ、ボキツという音と共に私の身体が地面に叩きつけられる。その拍子に重い卵は私の腕から逃げるように離れ、コロコロと転がり、私から5メートルくらい離れてようやく止まった。ヒビもなくどうやら無事みたいだった。

私は卵から視線を離し、素早く上半身を起こして振り返る。

そこに、リオレウスの大きな口があった。火傷しそうなくらいの熱い吐息が顔に吹きかかり、私は思わず金切り声を上げた。

私は素早く手と足を使って身体を後ろへ下がらせたけど、リオレウスも同様にじりつと私へと一歩足を踏み出したから、私の視界は相変わらず口だけだった。

その口が大きく開く。岩をも噛み砕きそうな鋭い牙が綺麗に並ん

でいた。

私が悪かった！ ごめんなさい！ 卵はそこにあるから、無事だから！ だから。

卵を指差しながらそう声に出そうとしたんだけど、リオレウスの迫力と威圧感の前に、私の口からはただ嗚咽の混じった吐息が漏れるだけだった。

た、食べられちゃう。

本気でそう思った。リオレウスの口から垂れた涎が、私のボーンメイルの隙間を通して地肌にその生暖かい感触が伝わる。全身に鳥肌が立つ。

そういえば、とふと思う。

“あのハンター”は無事なんだろうか。このリオレウスと対峙していたあのハンター。私と目が合った瞬間、『は？』という顔をして、無防備になった丁度その時にリオレウスの放った大きな火の球に焼かれ、アイルー達に運ばれていった、あのハンターは。

アレって、やっぱり、私のせいなんだろうなあ……。

生きてるの、かな。

大きく開いたリオレウスの口が私の顔を呑み込もうとし、私の視界が急に真っ暗になった。

もうダメだと思ったその時、どこからか、ゴツンと音がした。



その次の瞬間、私の視界は暗闇から開放され、光と共にリオレウスの赤い甲殻が目映る。ドシン、と足を翻し、どういう訳かリオレウスが私に背を向けた。長い尻尾の先が私の頬くらいに擦れて、ちくちくと痛い。

もう一歩、リオレウスが足を踏み出したところで、私は初めて、リオレウスの両足の隙間からその姿を確認した。

焦げ焦げになってしまっているけど、それは紛れもなく見覚えのある装備。

間違いない、“彼”だ。無事だったんだ。

## 第二話

丁度足元に落ちていた石ころを投げつけたただだったのだが、幸運な事にそれだけでリオレウスの気を引く事が出来たようで、奴はゆっくりと俺の方へ踵を返した。その巨体の後ろには小さくだが、あの“阿呆”の姿が見える。……どうやら何とか無事なようだ。転んだのだろうか、それとも奴の攻撃を受けたのか、全身に纏っているボーンシリーズのいくつかの骨が折れてしまっている。

しかし、全身に骨を纏った少女というのは……どうなのだろう、美的感覚を疑ってしまう。身に付けている側も気持ち悪くはないのだろうか。何と言っても骨なのだ。骸骨なのだ。髑髏なのだ。ボーンなのだ。

…前言撤回。俺の装備もまた、シウグンギザミの甲殻などから作られているので、ボーンシリーズとそういう意味では大差はないか。

「……さて、一気に片付けるか」

くだらない考えを頭から消し去ると、右手に大きな球状の物を握り締めながら、リオレウスと目を合わせる。奴も怒りに満ちているが、それはこちらとて同じ事。

油断したとはいえ、お前の火の球なんかにやられた自分に腹が立つ！

「目を閉じる！」

「へ？」

“阿呆”の返事や行動を確認する事もせず、俺は叫んだ瞬間、手に握り締めたそれ 閃光玉を力いっぱい、リオレウス目掛け投げ

つけた。それは綺麗な弧を描き、丁度リオレウスの顔にぶつかるくらいところで炸裂した。目を潰す程の眩しい光がエリア一杯に広がる一秒前に、俺は目を閉じて手で目の付近を覆った。

「ギヤアアッ！」

刹那の後、俺は目を開きリオレウスが怯んだ事を確認すると同時に、奴に向かって走り出した。いつでも抜刀出来るよう、ジャッジメントの柄を握り締めて。

「そこの！ 邪魔だから下がっている！！」

「え……？ 何も、見えない……」

「……ッ！ 目を閉じろって言っただろう！」

確かに俺の言い方も悪かったのかもしれないが、リオレウス相手に使う“手投げ式のモノ”は閃光玉と相場が決まっている。それを察知出来んとは……アイツは完全な素人ハンターだ。そんな素人が何故、しつこいようだが“あんな貧弱な装備”でリオレウスの巢食う森丘にいるかは知らんが、厄介だ。守りながら闘わざるを得んではないか！

「じゃあそこから動くな！ 視界が回復したらさっさとこのエリアから離れる！！」

「は、はい！」

リオレウスの顔の下まで来たところで俺は立ち止まり、同時にジャッジメントを大きく振りかぶり、力を溜める。奴はまだ暫くは視界は回復しない、つまり隙だらけだ。

数秒後、俺は力いっぱいジャッジメントを振り下ろした。鈍い感触と共にリオレウスの頭部の甲殻が抉れ、悲鳴に似た奇声が耳をつ

んざく。

もう暫くは閃光玉のおかげで怯んでいると思った俺の予想は外れ、振り下ろしたジャツジメントが勢い余って地面に突き刺さった瞬間、リオレウスが身体を翻し、顔と対となる尻尾が横から迫ってきた。次の行動に素早く移れないのが大剣の欠点で、素人なら間違いなくその尻尾のなぎ払いを喰らうだろう。だが、俺は生憎、素人ではない。

俺は素早く地面に突き刺さったジャツジメントを地面と垂直になるように起こし、更に刃が迫り来る尻尾に向けた。地面に菱形の穴が開く。その状態のジャツジメントを盾にするようにして構えた。瞬間、得物を支える手に重い衝撃が走り、消えた。ジャツジメントの刃に向け振られた尻尾が見事に切れ、地面に音を立てて落ちたのだ。そろそろ切れる頃合だと踏んだのだが、運が良かった。もし尻尾のダメージが少ないようだったなら、俺はジャツジメントごと吹っ飛ばされていただろう。

「攻撃力半減だな」

地面で倒れもがくりオレウスを見下ろしながら、ジャツジメントを構え直す。

さあ、次は突進か？ 火の球か？ それとも咆哮か？

頭の中で敵の行動とこちらの反撃をシミュレーションしながら待ったのだが、生憎、攻撃してくると思った俺の予想は外れた。

リオレウスの両の翼が大きく羽ばたき、巨体が宙に浮く。空へ逃げるつもりだ。

「チツ、閃光玉を」

地面に叩き落してやろうと思って懷に手を入れたのだが、閃光玉

の大きな球状の感触はいくら探してもない。どうやらさつき使ったので使い切ってしまったようだ。

そうこうしている内にリオレウスが飛び立つ際に生み出す風圧が草花を散らし、それが収まった頃には奴の姿は遥か上空にあった。

飛び去っていく方角を目で追うと、巢へと戻っていくのだと分かる。

……逃げられたが、まあいい。

既に瀕死状態だったか。全く、誰かさんのおかげで無駄に時間が掛かってしまった。

「おい、大丈夫か？」

俺は一つ大きな溜息を吐いてからジャツジメントを収め、アイツの方へと向き直った。

×××

あうう……目が痛いよお、何も見えないよおー。

閃光玉使うなら「閃光玉使うから目を閉じろ」ってちゃんと言っ  
て欲しかった。って言っても閃光玉自体、知識でしか知らなかった  
から、実際には人体にも影響が出る程の眩しい光を発する物だとは  
知らなかった。……いや、逆か。モンスターにさえ効き目がある強  
烈な代物だから人体にも効き目があるのか。うゝ……ホントに目が

痛いよう。

「おい、大丈夫か？」

不意に前方から男の人の声がした。さっきの人だ。

「目が……痛いです」

また目を開けようとするけど、目に映るのは白い光だけでまだ何も見えなかった。痛みが酷くなったので、またまた目を閉じる。

「……何から言っていていいか迷うのだが」

「はい？」

「まず……そうだな、何故リオレウスの巢食うこの地に、たった一人で、しかもそんな装備で来たんだ？」

何故って言われても……ねえ？

この人の声は半ば呆れ、半ば怒っているように聞こえる。そんな彼に、真正直に『飛竜が大事そうに守っている卵を盗みに来たの！』なんて言ったら一喝どころじゃ済まないような気がしたので、私は返答に困った。どうしよう、ここは正直に言うべきなんだろうか。

「聞こえなかったのなら、もう一度質問を言おうか？」

「……お母さんが」

迷った結果、嘘を吐く事にしました。

「お母さんが病気で昨日突然倒れてお医者さんの話では飛竜の卵が万病に効くらしいからハンターになったばかりの私だけど卵を持って帰るくらいならできるかなーって思ってたーとありあえず卵がどこ

にあるか村で聞いたなら森丘だつて言うんで早速準備してようやく辿り着いて必死で探したら見つかったんでさあ帰ろーって卵を抱えて洞窟から出たら　むぐっ!？」

「少しは落ち着いて喋れ！　そんなに早口で喋られたら聞き取るだけでも至難の業だ……全く」

息継ぎする前にいきなり口を塞がれたらマジで息が出来なくて苦しいんですけど!？」

「むぐっ、んんん~~~~~っ!！」

「……つと、すまん」

「ぶはあ!!　ハア、ハア……こ、殺す気ですかあ!？」  
「そんなつもりなら最初から助けんさ」

いやまあ、そりやそうだろうけれどもさ。どうもこの人は言う事が真面目過ぎて、冗談が通じないみたい。

……あ！　それで思い出した！　そういえばまだ　。

「つまり君は母親のために　」

「あ、あの！　先程は危ないところを助けて頂いてありがとございました!！」

「構わない。間一髪だった間に合って良かった」

「それで、あのーその……ごめんなさい！　私のせいで、その……」  
「それも構わない、気にするな。確かに最初はぶん殴ってやるうかと思っただくらい怒っていたが、よくよく考えれば結局、俺が油断していただけの事。俺もまだ修行が足りんな」

「あ、はは……そうですね」

「……そこは君が笑いながら同意するところじゃないと思うが」

ハンターさんは“君が”というところを強調して言う。……きつ

ついなあ、つい口に出しちゃっただけじゃない。確かに私なんてまだまだまだまだまだ修行が足りないよ。でもだってそりゃ、ハンター始めてまだ一週間も経ってないし、お金も素材もないから立派な武器や防具なんて夢のまた夢。でも……いや、詭弁はいいや、とりあえず謝るところ。

「ご、ごめんなさい」

「まあいい。つまり君は母親の病気を治すために、その卵を取って帰ろうとしていたんだな？」

「はい、そうです」

「……“飛竜の卵”が万病に効くなんて、長い間ハンターをやっているが、初耳だな」

ぎくつ。

「“売れば金になる”……の間違いじゃないか？」

ぎくぎくぎくつ。

「や、ややや、やーだなあハンターさん！　そ、そそそそんなわけないでしょう！」

「明らかに凶星のような気がするが……まあいい、そういう事にしておいてやる」

「あ  
」

『ありがとうございます！』って言おうとしたんだけど、そう言ってしまうばそれこそ私への疑惑を自ら証明してしまうので、寸前のところで言葉を止める事に成功した。

うん、私が卵を取ったのはお母さんのためだ！　お金のためなんかじゃない！　そう自分に言い聞かせてみても、頭に浮かぶのは能



天気にご近所のおばさんと談話する元気そんな母親の姿だけで、病気で倒れている姿なんて想像もできなかった。

「そろそろ目が見えるようになったんじゃないか？」

「あ……」

そう言われてみると目の痛みが大分治まっている。ゆっくり、ゆっくり、ゆっくり目を開けてみると、真っ白い光はさっきよりは大分マシになり、青や緑などの色が見えた。ただ、色が見えるだけではつきりした物の形状とかは分からなかった。うーん、目が悪いってこんな感じなのかな？

ま、きつとすぐに治るよね。そう思いながら、私はようやく立ち上がった。

んだけど。

「……あれれ？」

ついさっきまで走っていたせいか、私の両足は思っていたより疲れているらしく、酔っ払っている人みたいにふらふらと足元がおぼつかない。一步、二歩、三歩とよろよろと前へ後ろへ足を踏み出してバランスを持ち直そうとするけど、無理だった。

私の身体は後ろへ倒れ。

「おっと」

「あっ」

ぐしゃっ。

『おっと』は、ハンターさんが倒れそうになった私の身体で支えてくれた時の声。

『あっ』は、その拍子につい私の口から出た声。

そして『ぐしゃっ』は……。

……。

……ぐしゃっ？

足元を見る。物の形状をようやく見えるようになりかけの私の目でも、何とか“それ”は見る事ができた。

ハンターさんの青い足が、白い“何か”を、踏み潰していた。

### 第三話

「あああああああああああああああつ！  
！？」

女の甲高いヒステリックな悲鳴。それがすぐ傍から発せられると驚くべき事に飛竜などの咆哮を間近で受けた時のように、俺の左手は自然に片耳を塞いでいた。右手はというところと少女の身体を支えている。癖と言ってしまうばただの癖なのだろうが、耳を塞がなければ鼓膜が破られてしまうと感じ取った事には違いはない。女……恐るべし。

「たつ、たたたたつ、たたたたあつ！」

俺の腕に支えられたままの状態の少女が目を見開き、口をパクパクさせながら俺の足元を指差す。……いや、指摘されなくても分かっている。つい先程“何か”を踏み潰した感触があり、そして今は生暖かい液体に足が濡れていく感触がある。足元を見る間でもない、俺が踏み潰したのは。

「私の卵おおっ！！」

少女がやつとの事で単語を口に出す。……そう、俺が踏み潰したのは白くて大きな、つい先程までこの少女が必死に運搬していた“飛竜の卵”だった。倒れる少女を支えようとして大きな一歩を踏み出したその場所にあったのだろう。足元をよく見ていれば大丈夫だったのかも知れないが、生憎、俺の二つの目は片方は少女、もう片方は足元というように違う物を同時に見られる程器用ではない。……そんな器用な事が出来る者がいるのであれば、是非会ってみたい

ものだ。

「せっかく見つけた卵なのに！ 一体どう責任をとってくれるんですか！！」

案の定、俺が悪者らしい。確かに、直接手を下したのは俺だがいや、下したのは足だったか そんな状況を作ったコイツもコイツだ。立ち上がった際にふらふらとよろめいたりしなければ……いや、根本を言うと、リオレウスがいるのにも関わらず運搬なんてしようとしていたコイツが悪い。俺が助けなければ卵は勿論、命さえも落としていただろうに。

「物事は落ち着いて考える事が重要だ。確かに俺が」

「……いえ、そうですね。言いたい事は分かります。元はと言えば私が悪いんですよ」

驚いた事に、暫くは俺の言う事など聞く耳を持たないで理不尽なまでに俺を問い詰めようとするという俺の予想は大きく外れ、かなりあっさりと自分にも非がある事を認めた。荒げていた声から突然、落ち着いた声に変わる。……妙な感じだった。

何にせよ、とりあえず。

「とりあえず、自分の足で立つてもらえるか？ 結構重 いや、腕が疲れてきた」

『結構重いんだから』と言おうとしたのだが、さすがにそれはデリカシーに欠けると思い、言い直した。鎧やら道具やらがある分、重いのはある程度は当たり前なのだが、女というのは『重い』と言われるだけで執拗に怒る事があるので困る。

「あ！ すみません」

そう言いながら少女はようやく自分の足で立った。閃光玉が奪った視力はもうほとんど回復しているようで、少女はすぐに足元の割れた卵を見た。俺もようやく後ろへ一歩、二歩と下がり、卵に浸かっていた足を地面へと戻した。ただの水分ではないので、ぬるぬるした感触が今尚、足にある。……かなり、不愉快だ。

「この卵……なんか勿体無いですよ。あ、そうだ！ 焼いて食べませんか？」

「……………本気か？」

「本気ですよあー」

確かに割れた卵の中身は割れた殻の中に少しばかり残っていて、その殻に残った卵を一箇所に集めればある程度の量……まあ二人分くらい量はなるだろう。“飛竜の卵”はよく食されると聞くが、俺自信は食べた事がなければ食べようと思った事もない。割れていない綺麗な卵なら考えるかもしれないが、その卵は、俺が踏み潰したものののだ。

装備を洗ったのは先日、ババコンガと対峙した後だ。普段は洗わないのだが、ババコンガの投げた“アレ”が大量に装備に付着したので仕方なく洗った。……それ以来だ。

いつだっただろう。それが昨日や一昨日の話であれば首を縦に振るかもしれないが、それは少なくとも一週間以上前の話だ。つまり少なくとも一週間、洗わない状態で各地を歩き回り、あらゆる物を踏んだその足が卵を踏んだ事になる。その卵を食べるなど、想像しただけで嘔吐感が込み上げてくる。

「あ、肉焼きセット持ってませんか？ 私、丁度フライパンを持ってるんですよ。それで焼きましょう！」

何でフライパンを持っているんだ、何で！ というツツコミは心の中だけにして、俺は一つ大きな溜息を吐いた。変わった奴だ、ここが戦場であるという事をもう忘れているのだろうか？ いやまあ確かに、俺も戦場で肉を焼く事はあるが……。

「ね、肉焼きセット！」

「持っていない！ そんな事よりも俺はさっさと奴を狩って帰る！」

コイツを話していると疲れてくる。コイツの装備だとか、ここにいる理由だとか、そんなのはもうどうでもいい。コイツといると調子が狂う。

俺は少女に背を向け、リオレウスの巣に向かって歩き出した。

のだが。

「ついて来るな！ 死にたくないなら帰れ！！！」

少女が、俺の横にぴったりくっついて歩いていた。

×××

「ついて来るな！ 死にたくないなら帰れ！！」

「いやあゝ手ぶらじゃ帰れませんよ。だって私には病気で苦しんでいる弟がいるんですから。弟のためにも、私が“飛竜の卵”を」

「……母親のため、じゃなかったのか？」

しまった、そうだった。そう言っただけ。

「あれえ？ 弟って言いませんでしたっけ？」

「どうでもいい！ 邪魔だから帰れ！！」

「大丈夫です、自分の身くらい自分で守れますから！ それに、まだ卵は小さいのですけど沢山ありましたから、それを持って帰ります！」

「……リオレウスからは逃げる事しか出来なかったのか？」

「……………ランポスくらいならでしたら、何とか」

ハンターさんの目が私を睨む。怒りに満ちているのは明らかだった。

そりゃあ私も諦めが悪いのは確かだよ。でもせつかく長時間かけて辿り着いた森丘なのに、手ぶらで帰るのはどうしても気が引ける。出来れば“飛竜の卵”がいいんだけど、それが出来なくてもせめて何か珍しい物は取って帰りたい。

「……卵、割っちゃったのって、誰でしたっけ」

ぽつり、とそう呟いてみる。さっきはああ言っただけで、私はやっぱり多少なりともこの人を恨んでる。だって必死になって見つけ

て、必死で追い回されてまで守った卵だもんね。結果的に守ったのは私じゃなく、ハンターさんなんだけど。

そんな一言でも、ハンターさんの罪悪感を揺らがせる事が出来たみたい。心の中でどう思われようと、私はやっぱり、卵を持って帰りたい。

そう、お金のために！

「分かった、そんなに卵が欲しいなら俺が奴を倒した後にしろ。一緒にいて来ても構わんが、絶対に俺の邪魔だけはするな。いいな！」

「は、はい！　ありがとうございます！」

私は思わず、心の中で万歳した。

×××

飛竜の巣、とハンターさんが呼んだ場所は間違いなく、私がさっき卵を取った場所だった。薄暗い洞窟、地面に散らばる無数の骨、奇声を放つ数匹のランポス、そして地響きのような寝息をしながら、その巨体を丸くして眠っているリオレウス。

私達はそーっと巣の入り口から覗き込んでそれを確認すると、そのまま巣の中に飛び入るのではなく、一旦、入り口から数歩下がった。

「さて、君は一応ハンターだったな？」

「一応とは失礼ですね！　……“新米”ハンターです！」

「似たようなものだろう。ランポスが3頭……やれるか？」

「え！？　私が狩るんですか！？」



私は驚いた。『邪魔をするな』と言われていたもんだからてつきり見ているだけなんだと思っていたから。

「この状況だと、リオレウスを先に攻撃しようとするランポスが邪魔をし、ランポスを先に片付けようとするリオレウスが目を覚まして襲ってくるだろう。なら、同時に攻撃するのがベストだ」

「は、はあ……」

「心配するな。俺が先に突入してランポス3頭を素早く攻撃し、そのままリオレウスを叩く。ランポスは恐らく一撃じゃ死ななだろうから、とどめだけ差してくればいい」

そう言つて、ハンターさんは私の頭をぽん、と叩いた。

「君の背中中のハンターボウは飾りじゃないだろう？ それに、ランポス程度なら倒せると君は言った」

「い、いえ。さっきもランポスはいたんですけど、倒してないんです。何て言つか、その……私に気付かなかったみたいで」

突然、ハンターさんが何かに気付いたかのように私の身体を嘗め回すように上から下へと見る。……何か、セクハラっぽいような。

「……なるほど、ボーンシリーズ」

「はい？」

「ここには骨が沢山落ちているから、その装備が多少なりともランポスの目と鼻を誤魔化したんだろう」

なるほど、そういうことか。でも私からも攻撃するって事は、それはさすがに気付かれるよね。一撃……うっん、ハンターさんの攻撃も合わせるから二撃で倒さないと危ないって訳か。……出来るか

な、私に。確かに弓の腕なら同期のハンターには負けないけれど、下手すると3頭から同時に攻撃される事になるなんて……。

「とにかく、リオレウスに元気になられても厄介だ。そろそろ行くぞ」

「え、もうですか？」

「作戦は十分に理解しただろう。俺が先陣を切る、君は俺に続けばいい」

そんな事を言われましてもまだ心の準備というものが。

「行くぞ！」

「ちよっ……」

心の準備が出来ていないと勿論、武器の準備も出来ません。

ハンターさんは大剣の柄を握り締めながら巣の中に走り、私もすぐに後を追う。走りながらハンターボウを背中から取り外すのに四苦八苦しながら、ハンターさんの後を追った。……走りながら弓を取り出すのって難しいけど、慣れなくちゃね。

私がようやく左手に弓を、右手に矢を手にした時、既に戦闘は始まっていた。侵入者に気付いたランポスが声を上げ威嚇するけれど、その威嚇をしている最中に、1頭はハンターさんの手によってなぎ払われた。赤い血を飛び散らせながら、そのランポスが吹っ飛ばされる。

「一つ！」

今度は威嚇をやめた2匹のランポスが同時にハンターさんに飛び掛る。ハンターさんは即座に攻撃をガードする為に大剣を前へ出し

て構えた。瞬間、ガキインと音がして2頭のランポスの攻撃が大剣によって弾かれる。ランポスが着地した時には、ハンターさんの大剣は高く振りかぶられていた。

「二つ！」

1頭のランポスが上を見上げたと同時に、そのランポスの顔目掛けて大剣が振り下ろされた。ズン、と大剣が地面に突き刺さり、一秒の間を置いてランポスの身体が縦に真つ二つに割れて崩れた。

残された最後のランポスが「ギエエ」と奇声を上げながらバックステップしようと地面を蹴った。だけどハンターさんはそれを逃さない。

「三つ！」

ハンターさんが一歩大きく足を踏み出し、その足を軸に身体を一回転させた。一回転する身体より僅か遅れて大剣がなぎ払いの形で振り回され、間合いを取ろうとしたランポスは寸前のところで大剣の長いリーチに敗れ、首から大量の鮮血を散らした。重力に引かれるまま、ランポスは地面に叩きつけられ、やがて動かなくなった。

「凄っ……」

私は弓を構える事もないまま、口を半開きにした状態でランポスが狩られていく様を見ていた。口からは思わず感嘆が漏れる。こんなに素早くて、それでいて華麗な狩りは見た事がなかった。

ハンターさんが勢いをそのままにリオレウスへ向かって走った。私はハンターさんに圧倒されながらも、一応弓を構えながらランポスの生死を確認しようと走り出した。

全くもつ、ランポスを片付けてもリオレウス起きてないじゃん。  
私は弓の構え損かなあ。

なんて事を思った、丁度その時だった。

上空から、バサツバサツと翼が羽ばたく音がした。ランゴスタとかが羽ばたくようなそんな音じゃなく、それは紛れもなく、何か大きな生物が羽ばたかせる音。

私は、巣から唯一光が漏れる場所を見上げた。直前、リオレウスに攻撃を仕掛けようとしたハンターさんも同様に、攻撃する手を止めて上を見上げるのが見えた。

バサツ、バサツ。

逆光が眩しくて見え辛かったけど、それは間違いなく、リオレウスと同じような姿かたちをした、“飛竜”だった。

“飛竜”がゆっくりと巣へと着地し、巣全体がその衝撃で揺れる。

「……リオ、レイア？」

本で読んだ事がある。“火竜”と呼ばれる“飛竜”には雌雄がはっきりと分かれていて、赤色の甲殻を持った雄をリオレウス、緑色の甲殻を持った雌をリオレイアと呼ぶ、と。

そうだ、卵があるのなら、そこに卵の“両親”がいてもおかしくない。

「ギヤアアアウツ!!」

リオレイアの咆哮が洞窟のせいで反響する。

私の目はリオレイアの姿と、奥で立ち上がるリオレウスの姿を映した。

こんなの、無理だよ。一頭だけでも無理なのに、二頭同時なんて。

「これは……さすがに俺も聞いてなかったな」

小さく、ハンターさんが呟くのが聞こえた。

## 第四話

突如“巢”へと降り立った雌火竜　リオレイアに気を取られたせいで、俺は情けない事に、背後の唸り声が聞こえるまで雄火竜　リオレイウスが起き上がっている事に気付かなかった。気付き、振り返った時には時既に遅かった。

俺の目はリオレイウスの姿ではなく、甲殻の赤い色しか映せなかった。振り返った瞬間、右肩に強い衝撃と激痛が走り、俺の身体は宙へと吹き飛ばされたからだ。視界がぐるぐると回転する。白に黒、緑や赤など様々な色が代わり代わりに見え、それが止まったのは地面に落ちた衝撃から数秒後だ。

口の中を鉄の味が支配する。恐らく、地面に叩きつけられた際に口の中を切ったのだろう。

俺の身体に何が起こったかなど、簡単だ。目を覚ましたリオレイウスが隙だらけの俺に向かって尻尾を振り回したのだ。いや、正確にいうと尻尾の付け根か。本来ならそんな攻撃、リーチが短いため当たる事はないのだが……攻撃するために近付いていたせいで当たってしまったらしい。

身体中に走る痛み。直撃した右肩が特に痛む。装備のおかげで打ち身程度で済んでいる筈だが、この痛みだと骨が折れているかもしれない。

「……………あのボケ村長……………ッ！」

何が『リオレイウス一頭の討伐』だ。リオレイアまでいるとは聞いてない。二頭いると聞いていればそれ相応の準備がある。クエストを紹介する前にクエストの舞台となる場所の状況をちゃんと把握す

るのも村長の仕事だろうが。言いたくはないが、いい加減ボケてきたのではないか、あの婆さんは。帰る事が出来たら、一発、思いつきりぶん殴ってやりたい気分だ。

毒気吐きながら、俺は肩の痛みを我慢しつついつものように手を動かし、立ち上がった。痛みはあるものの右腕は俺の意思通りに動く。どうやら骨は折れていないようだ。

リオレウスは唸り声をあげながらこちらの様子を伺っている。本来なら攻撃の好機である訳だが、その場に大型モンスターが二頭いる以上、そういう訳にはいかない。俺はジャツジメントを構えようと して初めて俺の手にも、そして背中ホルダーにも剣がない事に気付いた。攻撃を受けた拍子に落としてしまったようだ。

剣はすぐに見つかった。事もあるうにリオレウスの足元にあった。取りに行こうにもあんな場所に武器も無しに突っ込めば必ず“痛い結果”が待っているだろう。

チラリ、とリオレイアの方を見る。不運な事に、“彼女”の標的も俺になってしまったようだ。“彼”と同様に、唸り声を上げながら俺を睨みつけていた。

挟撃、だと？ 冗談じゃない。

さすがの俺も二頭を同時に相手するなんて不可能だ。一頭ずつなら何とかなるんだが そう思った時、少女の存在を思い出した。今回は偶然にしろ、ここにはもう一人のハンターがいる。この死線を潜り抜ける為には素人だろうと玄人だろうと新米だろうと悪人だろうと何だろうと、協力してもらわなければならない！

俺の口は自然と開いていた。

「おい、いるんだろう！ 少しの間だけでいい、リオレイアの気を

引いてくれ!!」

5秒程待ったが、返事はない。

「おいっ! ……っ、返事くらいしろ!!」

そういえば名前を聞いてなかった。いや、この際どうでもいいが、少し不便かもしれない。

……更に3秒程待つが、返事はない。逃げた、のか? ……いや、まさかな。いくら新米ハンターでもこの地獄のような状況を一人で潜り抜けられるか否かくらい、判断出来る筈だ。

いや、してもらわなければ困る! そうでないと……一人で二頭を同時に相手にするなど、『死ぬ』と言っているようなものだ。玄人である俺が弱音を吐きなくなるくらい、鎧の中の俺の身体は緊張感から汗だくだった。

ドシツ、ドシン!

背後から重い足音がした。見なくても分かる、リオレイアが突進してきたのだらう。同時に正面のリオレイウスが唸り声を上げながら、顔を上へと向けた。口からは僅かにだが赤い光と黒い煙が見える。間違いない、火の球を吐くつもりだ。

後方に迫り来る巨体、前方に吐き出されようとする灼熱の塊。

どちらをとつても大ダメージは免れない。いや、武器がない以上、どちらの攻撃も防御は出来ない。攻撃のタイミングを考えると“彼の”のプレスは回避できるかもしれないが、“彼女”の突進の回避は無理だらう。突進の後は、それこそ“火竜夫婦の記念すべき何回目かの共同作業”が待ち構えている。それが意味するのは、間違いな



く  
“死”だ。

どうする？

相棒を取りに行こうとしても、今からでは既に遅い。手にするまでに俺は業火に焼かれてしまう。

ならばどうする？

……“アイツ”を信じる？ 無理だ、逃げてなかったところで、リオレイアの突進はもう止まらない。

どうするんだ。

どうしろって言うんだっ！？

×  
×  
×

鈍い音と共に、リオレウスの尻尾の付け根に吹き飛ばされたハン

ターさんの身体を見た瞬間、私の身体は“回れ右”し、そのまま巢の出口へと駆け出していた。

無理っ、無理無理無理無理無理っ！！

頭の中でまるでバカの一つ覚えみたいにその言葉を繰り返し、私は巢からようやく陽の光を浴びてホッとした。巢を出るまで異常なまでの時間が掛かったような気がする。私の身体は何時間も走ったかのように汗を吹き出し、足がガタガタと震えていた。

違う、足が震えているのはただ怖かったからだ。二頭の“火竜”の威圧感、そしてそれによる絶望が私を支配し、こんな恥ずかしい行動に出てしまったんだ。

「……最低だ、私」

荒くなった息を整え、唇を噛む。

『逃げる事は決して悪い事じゃない。適わない相手に遭遇した時や、相手が怒って手がつけられなくなってしまった時には、一旦退かざるを得ないだろう』

訓練所に通っていた頃の教官の言葉が思い浮かぶ。

『だが、一人で勝手に逃げ出すのは、ハンターのする事じゃない。仲間がピンチであれば救援しなければならぬ』

分かってる。何度も何度も、耳にタコが出来るくらいに聞かされた、あの人の口癖。

「『一人で逃げ出す臆病者に、ハンターである資格はない』……よね」

手に持ったままのハンターボウと矢を力一杯握り締める。こんな武器だけど、こんな防具だけど、何かハンターさんのために出来る事がある筈。

私は弓矢を地面に置くと、徐に腰に提げていたポーチの中身を地面にぶちまけた。バサバサバサと色々な物が地面に落ちる。訓練所に通っていた頃からポーチは整理していなかったから、余計な物とが要らない物、沢山入っていた。

何か、何か使えそうな物は。

目に付いたのは矢の殺傷力を高める“強撃ビン”、モンスターの体内に麻痺毒を撃ち込む、“麻痺ビン”だ。でもビンの中身がどちらも半分もない。“強撃ビン”はともかく私の経験からして、モンスターを麻痺状態にするには少なくともビン一本くらいは使わないといけない。麻痺らせる事が出来ないんなら、このビンは使う意味はない。

私はとりあえず“麻痺ビン”をポーチの中にしまい、“強撃ビン”を弓矢の傍に立てた。

こうして見ると、今回は狩猟に来るつもりじゃなかったとは言え、狩猟には関係しない物ばかり入っている。フライパンに教官からもらったコインの類、ハチミツに釣りミミズ、石ころ、カラの実……アオキノコ、ニトロダケ、特産キノコ、ツタの葉……あーもう、私のバカあー！ 何か使える物が一つくらいあってもいいじゃんか！！

私は自分自身に憤りを感じながら、“強撃ビン”を除いたポーチからぶちまけた物を素早く元のポーチに入れると、ハンターボウを手に立ち上がった。ピンを矢にセットしようとしたその時、少し移動させた足に何かが当たった。

「…………あれ？」

多分、ポーチをぶちまけた際、私の真下まで転がったせいで分かなかったんだ。私は足元の“それ”を拾い、何であるかを思い出す。

そうか！　これなら…………っ！！

私はハンターボウを背に、矢を腰のホルダーに戻すと、手に“それ”を持って巣の中へと急いだ。

「…………ハンターさん、今行くから待っててね！」

×××

「死んで、たまるかああっ！！」

俺は意を決して振り返り、リオレイアに向かって走り出した。“彼女”の巨体との距離が一気に縮まる。俺は一瞬だけ“彼女”と目を合わせ、そして視線を下へと向けた。そう、“彼女”の両足だ。

それは、決死のスライディングだった。

巨大な飛竜種の巨体を支える二本の足は、大体1メートル感覚で生えていて、その間は人一人くらいなら悠に潜り込めるスペースがある。俺はその点に注目し、両足の間を潜り抜けるべくスライディングしたのだ。下手をすれば踏み潰されたり蹴飛ばされたりし、そうなった時点でゲームオーバーだが、どちらにせよ僅かな可能性に縋るにはそれしかなかった。こういった一瞬の判断の賭けは嫌いじゃない。今までだってそうして生き延びてきたのだ。

ドシンッ！

顔のすぐ隣を“彼女”の足が踏んだ。衝撃と轟音で耳が潰れそうになる。だが、それはすぐになくなった。俺の身体は無事、リオレィアの足と足の間を潜り抜ける事に成功したのだ。

土埃を上げながら、俺の身体がようやく滑るのを止めた。ホッと一息吐く事もせず俺はすぐさま振り返り、後退りしながら二頭の様子を確認した。

「ギヤアアアッ！！」

「ギヤウッ！！」

二頭の火竜が悲鳴に似た声を上げる。“妻”の突進が勢い余って“夫”に直撃し、“夫”のブレスが“妻”の顔面に直撃したのだ。そのまま“夫婦喧嘩”に発展しないだろうかと期待したのだが、恐らくそれは無理だろう。

俺は再び振り返り、巢の出口に向かって走り出した。が、俺の目に、出口の方で佇む一つの人影が映った。光で顔だとか、何をしているとか逆光で見えないが、誰であるかは分かる。……逃げ出したと思っていたあの少女だ。

「おい、お前っ！ さっきはよくも……っ！！」

「ごめんなさい！ でも、もう逃げません！ 私も戦います！！」

俺の次の言葉を遮り、前方の影が答える。……まあいい、結果が全てだ。俺は何とか生き延び、少女が戻ってきた。そして体制を立て直す為には間違いなく、この少女の力が必要なのだ。……いや、“力”ではなく、“存在”が！

「止まってください！！」

「は！？」

「いいから！！」

少女まで後10メートルくらいのところで俺は不意に叫ばれ、不意ながらも言われるがまま前へ行こうとする身体に急ブレーキをかけた。足が滑り、土煙を上げる。

俺はどういう事が訳を聞こうと視線を前に戻そうとしたところで気付いた、俺のすぐ前に仕掛けられたその存在に。

「私が囷になります。ハンターさんは引っ掛かったその時を狙って攻撃してください」

「そうしたいところだが、生憎武器が今、奴らの足元にある」

「えー！？ 何やってるんですかぁ！？」

「……確かに自分でも情けないが、君に言われたくはない！！」

俺が奴らの様子を再度確認しようと振り返ろうとしたその時だ。

「これを使ってください！！」

ポーチから何かを取り出した少女が、それを俺に向かって投げた。てつきり投げナイフの類か何かだと思った俺の予想は……大きく外

れた。それを手に受け取った瞬間、脱力感と憤怒が同時に込み上げてくる。少女が投げたそれは武器でも何でもない！

「……っ、フライパンでどうしろって言うんだっ！！ フザけてる場合か！！」

「文句言わないで下さい、何もないよりはマシでしょう！？」

「馬鹿な！ こんな物、武器にも盾にもならん！！」

「だから文句言わないで下さいって！ あ、来ますよ！！」

「~~~~っ！！！！」

言葉にならない声を上げながら、俺は振り返った。リオレイアがまたしても俺達に向かって突進を仕掛けるべく、走り出していた。……早くも“引っ掛ける”好機だ。だが、リオレウスの姿が“彼女”の巨体に隠れて見えない。どんな動きをするのか気になるところだが……まあいい、突貫するだけだ。

「俺はリオレイアの攻撃をかわしたら剣を取りに走る！ そしてまずリオレウスを叩く！」

「分かりました！ リオレイアは私に任せ ……られても困りますから、出来るだけ早く戻って来てくださいね！」

「善処する！ 君は無理だと思ったなら逃げ回っている！」

「らじゃ！」

俺は弓矢を構える少女の真正面に立たないように二歩左に動き、リオレイアを待った。俺が移動した瞬間、背後から『ビュン』と風切り音が聞こえ、少女のハンターボウから矢が放たれた。次々と放たれる矢は一直線にリオレイアの翼を貫き、消えていく。

片方の翼を集中攻撃出来ている事に俺は少しかり感心した。突進中の飛竜種の翼は地面とほぼ平行となるから狙いにくい。だが少女はその僅かに見える翼を一本の矢も外す事なく攻撃しているのだ。

矢に翼を撃ち抜かれてもリオレイアは怯む事はない。俺は“彼女”がこちらに突っ込んでくる瞬間に大きく飛び込んで前転し、突進を回避した。すぐさま振り向き、“それ”を確認する。

「ガアアアッ!!」

リオレイアの巨体が少女のすぐ前で動きを止め、奇声を上げながらビクビクと痙攣していた。間違いなく、“シビレ罌”に引っ掛かったのだ。動きが止まった瞬間、少女がリオレイアの右側へと走り、そこから再び矢の雨を降らせる。

急ごう。“シビレ罌”はそんなに持たない。

俺は視線を前方に戻し、走り出した。

「……?」

しかし、前方にリオレイアの姿はなかった。地面にジャッジメントが落ちている事は確認出来るのだが……。

「ギャウツ!!」

それは、上からだった。

走り出した俺の前に突如灼熱の塊が落ちてきた。上からリオレイアが火の球を吐いたのだ。地面に衝突し弾けた球が火の粉となって、俺の身体に浴びせられる。

「チィ……ッ!」

舌打ちし、俺は再びジャッジメントに向かい一直線に走り出した。“彼”もそんなに連続してブレスを吐ける訳ではない。吐けたとし



ても多少なりとも間隔が空く。

だが、予想外に上空のリオレウスが再び息を吸い込み始めた。間違はなくブレスを吐こうとしているのだ、こんな短い間隔の中で！全速力で走っている以上、ブレスが俺に向かって放たれるのなら俺に当たる事はない。しかし“彼”も阿呆ではない、俺の前方に向かって放たれてしまうと、俺は紅蓮の炎に焼かれてしまう。

「この……っ！」

俺は手に持っていたフライパンをリオレウスの口目掛けて投げた。フライパンはぐるぐると回りながら放物線を描き、そして。

何に当たる事もなく、地面に落ちた。

当たり前だ、リオレウスが高いところにいるせいで、必要以上の重力に引き摺られたからだ。

妙な期待をしていた自分に苛立ちながらも、俺は走った。だが幸運にももうリオレウスの口からブレスが吐かれる事はなかった。フライパンの攻撃は当たらなかったものの、“彼”を驚かすには充分だったようだ。

リオレウスが地面に降り立とうと降下を始めたのと同じくらいに、俺は“彼”の着地地点まで辿り着いた。地面に落ちていたジャッジメントを拾い、一つ、大きく深呼吸する。

「さあ降りて来い……っ！！」

ジャッジメントを大きく振りかぶり、力を溜める。この一撃で、リオレウスにとどめを差すために。

巨体が地面に近づくにつれて強い風圧が生まれ、地面に落ちてい

た骨がカラカラと吹き飛ばされる。その風圧を前に俺も立つのがや  
つとだった、歯を食い縛り、それに耐えた。

やがてリオレウスの巨体が大剣の攻撃範囲に入った。その瞬間、  
俺はジャツジメントを力一杯振り下ろした。

「ハアアアッ!!」

一瞬、刃がリオレウスの甲殻に食い込み、止まる。だが俺は一撃  
の勢いはその程度では止まらない。まるでハンマーの一撃のように  
ジャツジメントがリオレウスの巨体を地面へと叩きつけ、刃がつい  
に甲殻をも切り裂いた。赤い鮮血が飛び散り、俺の装備や顔に付着  
する。

「ギ……アアアアアアアアアアウツ！」

ジャツジメントが地面に突き刺さった瞬間、リオレウスが鎌首を  
持ち上げてもがいた。

まだ息があるのか　そう思ったのだが、持ち上げられた鎌首は  
何をする事もなく、音を立てて崩れ落ち、やがて動かなくなった。

「クソッ……手間を掛けさせやがって……っ！」

一息吐きたいところだが、そういう訳にはいかない。何故ならま  
だ、戦いは終わっていないからだ。

「　あああああっ!!」

甲高い悲鳴に反応して、俺は少女の方を見た。

リオレイアの大きな口が、少女の脇腹に噛み付いていた。

## 第五話

やばっ、調子に乗りすぎたかな！？

ボンッ、という爆発音が下の方から聞こえたその瞬間、リオレイアが動きを再開した。両足をドシンドシンと二、三回持ち上げては地面に降ろし、上に向かって声を上げる。咆哮のように耳を塞ぎたくなるものじゃなかったのは幸運だったけど、両翼がバサッと一度羽ばたかせて生じた風圧が、調子に乗ってリオレイアに攻撃を仕掛け続けていた私への不意の一撃と化した。

正面から誰かに押されたかのような衝撃。私の足は懸命にもバランスをとろうとするんだけど、後ろへと大きく反ってしまった上半身はもう元には戻らなかった。

「うきゃんっ！」

ぺたんと尻餅をついたけど、今の私にはお尻に青アザが出来ちゃったかなあとかいつもみたいに確認する余裕なんてなかった。

リオレイアの両目が、ギロリと私を睨んだ。身体が金縛りにあったかのように動かなくなる。口の中が突然カラカラに乾き、喉の奥からはただ声にならない嗚咽が漏れる。

駄目だ、駄目だ、駄目だ、駄目だ、駄目だ！ 身体を動かせ！  
次の行動を考える！

そう自分に言い聞かせ、私はリオレイアに睨み返ししながら両手に握っている物を確認した。左手にはハンターボウ、右手には放ち損ねた一本の矢。どちらもその感触があった。それを決して放さないように改めてしっかりと握り締め、私は自分の身体に鞭を打つように立ち上がった。

私はハンターだ。相手がモンスターならその専門じゃんか！ 怖がってどうする！

不意に、リオレイアが大きく口を開き、息を吸い込み始めた。私のシックスセンスが『危険』を告げるのと同時に、脳裏に過ぎるリオレイアの“あの動き”。あのハンターさんを焼き尽くした攻撃火の球を吐き出す前に、今のリオレイアと同じように息を吸い込んでいた！

間違いなく火の球を吐き出すつもりだ。しかもこんな至近距離で！

私はリオレイアの側面に向かうように地面を蹴った。その瞬間、耳を塞ぎたくなるような轟音と共にリオレイアの口から特大の火の球が放たれた。

間一髪……というよりは若干の余裕があった。私はその業火の熱を感じた瞬間に前方へ飛び込んで回避したんだけど、業火は殆どさつきまで私が立っていたところに向かって放たれていた。

火の球は避けるのが比較的簡単だけど当たればほぼ一撃で訳ね……私のこの装備ならまず間違いなく……そう想像しただけで身体が震えてくる。でもこんな事じゃビビってられない。私にも避けられたんだ、油断さえしなければ火の球なんか怖くない。

私は顔や装備についた土を払う事もせずには急いで立ち上がり、武器を構えながらリオレイアに向き直った。リオレイアが私の方へ向き直ろうとする前に、リオレイアの頭を目掛けて一発、矢を放つ。頭に向かって真っ直ぐに飛んだ矢はリオレイアの頭に直撃したんだけど、やっぱりこの弓の威力じゃ甲殻に傷一つ付けるくらいが精一杯みたいで、矢はキンという音と共に甲殻に弾かれて地面に落ちた。

……硬い。やっぱり翼みたいに大したダメージは与えられそうに

ない。翼への攻撃もそんなにダメージにはならなさそうだけど……  
そうだと、“アレ”にならず矢でもダメージを与えられるはず！

新しい矢を腰に提げている籠から取り出し、再び弓を構えようとしたんだけど、リオレイアの攻撃の方が早かった。ほんの数秒だけ矢の籠の方へ目をやってからリオレイアに視線を戻すと、目に映ったのはリオレイアの顔じゃなく、後姿だった。

リオレイアが何をしようとしているのか考える間もなく、刹那の時間差の後、私のすぐ頭の上を何かが空気を切りながら横切った。……尻尾だ。もし私の身長がもう少し高かったら、リオレイアの尻尾攻撃がもう少し下だったら　そう想像しただけで全身に鳥肌が立つ。

リオレイアの身体が一回転して、再び私と目が合う。……いつ見てもおっかない。

私はリオレイアと目を合わせたまま、ゆっくりと後退りした。尻尾攻撃　もとい物理攻撃の間合いにいる事は“アーチャー”……即ちガンナーのする事じゃない。ガンナー用の装備は動きやすいよう軽く出来ている代わりに、剣士用の装備よりはるかに脆い。ランポスの攻撃でさえ下手をすれば致命傷になるくらいだ。

一步、二歩、三歩……と後ろに下がるけど、リオレイアはこっちを睨み付けたままで攻撃を仕掛けてくる気配はない。

何かを、待ってる？

そう思ったその時だった。

ぐちゃっ。

「えっ……」

何かを生暖かい物を踏んだ感触と共に身体のバランスが崩れ、私はさつき翼の風圧で転んだ時と同じように、後ろへ倒れた。たださつきと違うのは、バランスを取ろうとしたもう片方の足も何かにつかったから、私はお尻からじゃなくて背中から地面に衝突した。その衝撃に私は思わず咳き込みながら、身体を起こして踏んづけた“何か”を目で見る。

「ゲホッ、ゲホオッ！ な、何 ……っ！！？」

……見たくもない光景が、そこにあつた。端的に言うとそれは、“赤い肉片”。……そう、ハンターさんに真つ二つにされた二匹目のランポスの片側。私はその“内側”を踏んだんだ。

踏んだ足の感覚とグロテスクな“それ”の光景が私を気持ち悪さで一杯にしていく。あまりの気持ちの悪さに目に涙が溢れそうになる。胃の奥から何かが込み上げて来そうになる。お腹の底から悲鳴を上げたくなる。

だけど私が見た次の光景は、そんな私の感情を皆無にさせるものだった。

迫り来る、大口を開けたリオレイアの顔。規則的に並ぶ大きな牙は、間違いなく私を噛み砕こうとしていた。

回避どころか瞬きする時間さえなかったかもしれない。それでも私の身体は意思とは無関係にそれを避けようとしていた。

勿論、その行動は無駄に終わった。

「あああああつ！！」

今まで感じた事のない衝撃と激痛は、まるでここが生き地獄であるかのような錯覚を起こさせる。喉の奥から込み上げて来た熱い液体は口の中に留まる事なく、私の口から溢れては重力に引かれて音もなく落ちる。一瞬ブラックアウトした視界はすぐ元に戻り、私の身体がどうなっているかという現実を見せつける。

リオレイアが私の身体を持ち上げていた。……その牙に、私の身体を突き刺して。

この噛み付きは私を捉えるものだったんだろうか。普通、こんなに発達した顎に噛み付かれたら真つ二つかそれ以上に身体が分かれるはずなのに、牙の刺さりは深くない。防具があるとは言え、こんな脆い骨で出来た防具がそんな効果があるとは思えなかった。

原因……リオレイアの思惑がどうであれ、それが幸か不幸かなんて、決まってる。

どうせ死ぬなら、出来るだけ痛みを感じたくはなかった。

私を銜えているリオレイアの顎に力が入るのを感じた。牙がゆつくりとゆつくりと、私の身体に沈んでいく。声にならない悲鳴が鮮血と共に口から漏れる。

ゆつくり、ゆつくりと？　リオレイアは私を痛みに悶えさせながら殺したいの？

……違う、モンスターはそんな“S”な事を考えたりしない……

等。だとしたら ……。

……………そう、か。“アレ”が効いてきているんだ。そう考えると、火の球が簡単に避けられた事、尻尾攻撃が私に当たらなかった事、一撃で私の身体を噛み千切る事が出来なかった事……全て、説明出来る。

量が量だから完全に動きを止める事は出来ない。だけど、ビンに半分くらいしかなかった“麻痺ビン”の麻痺毒はリオレイアの身体を鈍らせるには十分だったみたい。“強撃ビン”がなくなつた後に何も無いよりはマシだろうと使ってみただけど、結果的に大正解だった。

幸か不幸かで言うことやっぱり不幸なんだろうけど……それでも、少しだけ幸に傾いていたみたい。

生を諦めかけていた私の手に、再び力が入った。それと同時に、リオレイアの身体の向こう側のあの人の姿を、私の目は捉えた。

嗚咽ばかり漏らしていた口が自然に、フツ、と笑みを作る。

ズンツ、という何度が聞いた事がある音と共に私の身体はリオレイアごと揺れ、やがて刺さっていた物が抜けるという別の激痛が走った後、ようやく掛かっていた枷が外れた。

ちよつと遅過ぎるよ、ハンターさん……。

心でそう呟きながら、私はやがて来る地面への衝突の衝撃を覚悟



した。

暫くして、覚悟していた以上の激痛が走って、意識が飛んだ。

## 第六話

俺は、ハンター失格だ。

大口に銜えられてぐったりとしている少女の姿を見ながら、唇を噛む。

多少冷静さを欠いていたのかも知れないが、結果的にその判断を下したのは間違いなく俺であり、そんな事は言い訳にもなりはしない。

リオレイア一頭の恐ろしさは十分に分かっていた筈だ。いや、どんなモンスターでも熟練したハンターであれ、たった一瞬の判断ミスと油断が命取りになる 十分に分かっていた筈なのに！

……だがいくら後悔し、自分を責めたところで何の解決にもならない。

俺はジャツジメントに付着したりオレウスの血を拭う事も払う事もせず、片手で相棒を引き摺る形でリオレイアに向かって全力で駆けた。重い大剣が地面を抉り、土埃を上げる。

少女を食う事に集中しているのか、もしくは別の原因があるのか、リオレイアは俺に気付きもしなかった。何にせよ、幸運な事だ。無防備に伸びた長い尻尾が、丁度俺の頭の高さくらいでゆらゆらと揺れている。

引き摺っていたジャツジメントの柄を握る右手に力を込め、ジャツジメントをその状態から無理矢理頭上へと持ち上げようとした。大剣のあまりの重量と無理な体勢からの行動に、右腕全体の筋肉が

悲鳴を上げる。だが辛かったのはジャツジメントを握る右手が丁度右肩くらいまで上がるところまでで、そこから先は走っている勢いと左手の力添えのおかげで軽くなった。

勢いをそのままに、俺は両手でしっかりとジャツジメントを握り締め、リオレイアの尻尾目掛けて振り下ろした。

ズンッ！

振り下ろしたジャツジメントの一撃によって切断されたりオレイアの尻尾が重々しい音を立てて地面に落ちたとほぼ同時に、噛み付かれていた少女も地面に落ちた。近くで見た訳ではないが、身体を噛み千切られていないところを見るとまだ生きている可能性がある。……望みは、0ではない。

尻尾を切断されたりオレイアが起き上がる前に、俺はジャツジメントを背中のホルダーへと押し込もうとしたところで、右肩の違和感に気付いた。右肩辺りの筋肉に、若干だが痺れと痛みがある。

チツと舌打ちし、少女の元へと駆け寄りながら首から提げていたネックレスを引き千切った。ハンターを始めてからずっとお守り代わりに持っていた物、絶対に失くさないようにネックレスにせずと身に付けていた物。……親父が俺に最後に遺してくれた物。

……まさか自分ではなく、他人に使う事になるとはな。

少女の元へようやく辿り着き、横目でリオレイアを見る。……まだ起き上がれていない。

俺は急いでぐったりとしている少女の上半身を左手で抱えると同時に、右手に持った“それ” “いにしえの秘薬”と呼ばれる液体が入った、丁度俺の人差し指くらいの大きさの小さな瓶の蓋を、

歯で挟んで開けた。歯の間に挟まった瓶の口を塞いでいたコルクを素早く吐き出す。……瓶の中からの独特の刺激臭が鼻腔を衝く。

リオレイアの動向を気にしながら、少女を起こそうと身体を揺さぶった。

「おい、起きろ！ 目を覚ませ！」

少女はぐったりしたままぴくりとも動かない。装備が邪魔で脈を計る事も吐息を感じる事も出来ないから、少女の生死を確かめる術など、今の俺には思いつかなかった。ただ出来るのは、少女が生きていると信じる事……それだけだ。

ドシン、とリオレイアがようやく地面を踏みしめ、起き上がり始める。……くそつ、これ以上時間を掛けられないか！

人差し指と親指で瓶の口元を持ち、中指と薬指を躊躇う事なく少女の口へと突っ込む。小さな唇を押しどけ、僅かに開いた歯と歯の間に指を入れる事に成功すると、そのまま中指と薬指を開き、無理矢理口を開かせた。血で真っ赤に染まった口内が露になる。急いで瓶を傾け、その開いた口の中に、“いにしえの秘薬”を注ぎ込む。もしかしたらこの行為自体、無駄なのかもしれない。……だが、俺はそれでも……。

そつと少女の身体を地面に降ろすと、すぐに次の行動に移る。とにかく、少女からリオレイアを遠ざけなければならない。……近付かせない為には、俺が奴の標的になり、少女から離れればいい。至極、簡単な事だ。

俺は地面を蹴り、リオレイアの右翼側へと急いだ。奴は既に起き上がっていて、口から火を漏らしながら俺を睨んでいた。

「……そうだ、お前の相手はこの俺だ！」

叫び、右手に握り締めたままだった秘薬の入っていた小瓶をリオレイアの顔目掛けて投げ付ける。コン、と音がしてそれは奴の鼻の辺りに当たり、地面に落ちた。その間にリオレイアの右翼の方へ辿り着いていた俺を、奴は首を捻って睨みつける。俺の思惑通り、奴の標的は完全に俺になったらしく、奴は俺の方へと身体を向け直した。

さて、と背中ホルダーからジャッジメントを取り外し、構える。その瞬間、ビリツと右腕に電流が流れたような衝撃が走り、俺は思わず一瞬だけ、顔を引き攣らせた。……大した痛みでも痺れでもない……だが。

怒っているリオレイアを前にしていても、己の情けなさに苦笑してしまふ。馬鹿な事をしたものだ、と。

リオレイアが小さく咆哮する。開戦の合図だと言わんばかりに。

当然、そんな合図などなくとも戦いはとくに始まっている。言わねばリオレイアが俺と同じエリアに踏み入った瞬間からだ。

俺はリオレイアが咆哮している隙に素早く移動してジャッジメントを振り上げ、少女の弓矢でボロボロに穴が開いている右翼の、鋭い爪に向かって振り下ろした。

「ガアアアウト!!」

バキンという音と共に、ジャッジメントの一撃が長く鋭い翼爪を根元から切り落とす。そこで攻撃の手を休めず、更に二撃、三撃へと繋げる。

地面に突き刺さったジャツジメントを素早く抜き、今度は翼に向かって突きを放った。硬い甲殻に守られていない柔らかい箇所である為、そんなに力を込めていない突きでも十分に貫通する。間髪入れずに大剣を翼に突き刺したまま、刃が向いている方向　リオレイアの尻尾の方に向かって振り下ろした。肉を裂く感触がジャツジメントを通して俺の腕に伝わる。返り血が降り注ぎ、装備を赤く染めていく。

ジャツジメントが再び地面に突き刺さった時にはリオレイアの右翼は既に見るも無残に切り裂かれ、使い物にならなくなっていた。恐らく俺が攻撃する前から穴だらけだった為、使い物にはならなかっただろうが。

リオレイアが奇声を上げながら反撃を繰り出す為、身体を一回転させる。……今度は尻尾の付け根に吹き飛ばされるなどという失態を演じない。俺は素早く身を屈めて攻撃をやり過ぐすと、更に反撃に転じようと立ち上がり、ジャツジメントを持ち上げようと柄に掛けた両手に力を込めた。

だが、ジャツジメントの刃先は地面に刺さったままだった。

「痛い……っ!？」

再び、右腕に電流が流れるような衝撃が走る。……今度は、激痛を伴って。

右手は動く。感覚もある。だが、何かを握り締める力は皆無に等しかった。右手に上手く力が入らない、入れる事が出来ない。無理に力を入れようとすると、先程と同じように右腕全体に激痛が走る。

「冗談じゃ　ぐあぁっ!!!？」

「冗談じゃない」とそう口にしようとしたのだが、それより先は己の悲鳴によって掻き消された。右肩に衝撃が走り、吹き飛ばされたのだ。…俺はまたしても失態を演じてしまった。いくつかの不運が重なった結果とは言え…くそっ！

リオレイアが尻尾攻撃を連続で行う事など滅多にない。その経験と先入観が油断を生んだ事が最大の原因だ。

俺の身体は宙に舞い、視界がぐるぐると回転する　　リオレウスの攻撃にやられた時と同じように。

やがて俺の身体は地面に衝突した。

そしてそれは、俺の身体が完全に停止するのとほぼ同時だった。

ザシュッ！

俺と共に吹き飛ばされたジャツジメントが、幸運な事に俺の左側の地面へと突き刺さった。左手を伸ばせば何とかは刃に届くような距離だ。この右腕の状態では満足に得物を振るう事は出来ない。だが、丸腰よりははるかにマシだ。

二回の右肩への集中攻撃は、確実に俺の右肩を故障させた。骨こそ折れてはいないのだが、今は少し右腕を動かすだけで、右肩に激痛が走る。…全て、一時的な物であると祈るしかない。そうでなければ、俺は少女共々、リオレイアの胃袋の中に収まってしまふ。

俺は右腕に負担を掛けないように左腕だけを使って素早く立ち上がると、左手で地面に突き刺さったジャツジメントの柄を握り、引き抜いた。片手では振り回す事は出来ないが、持ち上げるくらいなら何とかなる。

怒り状態のリオレイアの行動はやはり速かった。俺がジャツジメントを引き抜いた瞬間、奴の口から巨大な灼熱の塊が吐き出される。

回避する時間などなかった。俺は左手でジャツジメントの刃の腹を火球へと向け、肩の痛みを我慢して右手を刃の腹に添えた。

「っ！！！」

瞬間、火球の熱と衝撃が俺を襲った。ジャツジメントのおかげで火球は殆ど俺に当たる事なく弾けたのだが、弾けた火の粉が俺の身体に降り注ぎ、更に火球を受け止めた衝撃が右肩にモロに伝わり、思わず悲鳴を上げたくなるような激痛が走る。

だが、泣き言など言っていられない。右肩一つと命二つなら、後者を優先させなければならぬ事は百も承知だ。

視界から真紅の炎が消えると同時に、再び俺の視界にはリオレイアの緑色の甲殻が映る。火球を放って一息吐いているのかと思いきや、俺に向かって突進を仕掛けて来ていた。

怒り状態のモンスターは本当に行動が速い。俺はリオレイアの行動を確認すると同時にジャツジメントを左へ軽く投げ飛ばし、大剣の方に向かって飛び込んだ。前転の際に右肩に力が加わり、痛みが顔が歪む。

リオレイアの突進を回避し、俺は地面に転がったジャツジメントを左手で再び持ち上げた。奴は突進の勢い余って転倒し、もがいていた。攻撃の好機なのだが、この隙に回復を行おうと腰に手をやる。だが……そこには何もなかった。

しまった。回復薬は全て使い切ってしまったのだ。薬草など持って来ていないし、アオキノコとハチミツもない。秘薬はさつき少女に使ってしまった……つまり、今の俺は傷を治療出来るアイテムは持ち合わせのない事になる。

舌打ちし、唇を噛む。



森丘に生えている薬草を探しに行くか？

駄目だ、少女一人をここに残しては行けない。

このまま戦うのか？

武器を満足に扱えない状態では、勝算などない。

ならどうする？

……奇跡というモノを、信じてみる。

「……奇跡、か」

“それ”を信じる為には、俺はこの場で、この状態でリオレイアと対峙し続けなければならない。

そう、少女が目覚めるまで。

自問自答している間に、リオレイアは起き上がり俺へと向き直ろうとしていた。

回避か、防御か。奴の行動に対し、今の俺にはこの二つしか選択肢はない。

リオレイアの動向に集中しようとしたその時、俺は初めてその事に気が付いた。

そこに倒れている筈の、少女の姿が、なかった。

一体いつからいないのだろう。そして今はどこにいるのだろう。  
まあ、いい。これで何らかの“奇跡”が起きる可能性は高くなっ  
た。

俺はただ、少女を信じて、リオレイアと対峙するのみ！

「さあ来いリオレイア！ このアルトア＝イゼンリイの首、簡  
単にはやれんぞー！」

## 最終話

「このアルトアイゼンリイの首、簡単にはやれんぞー!」

……くああゝつくいゝ、ハンターさあん。んもーう、惚れちゃいそつですよー。

なんて笑ってられるような余裕は今の私にはなく、口から出たのは苦笑に似た擦れた笑い声だけだった。身体が、まるで自分の物ではなくなってしまったかのように、重い。だるい。しんどい。このまま永遠の眠りに就きたいような衝動に駆られ、瞼が私の視界を闇色に染めようとする。

だけど私は、眠る訳にはいかない。だって、成すべき事が、私にはあるから。

満身創痍の身体を引き摺り、ハンターさんがリオレイアの気を引いている内に高さ2メートルくらいの段差を登り切ったところで、私は骨だらけの地面に仰向けに寝転がっている。少し身体を動かすだけでカラカラと何の物だか分からない骨と骨がぶつかり、音を立てる。

ハンターさんがリオレイアの気を引いている限り、リオレイアの鼻が私の血の臭いを嗅ぎ分けられない限り、私はここで少しの間だけだけれど、身体を休める事が出来る。

私の身体に何が起きたか分からない。リオレイアに噛まれた傷の出血は気付いた時には止まっていて、痛みは凄く和らいでいた。でもそれは決して奇跡なんかの類じゃない事は、口の中に残る血以外の独特の苦味が証明していた。薬物を思わせるような苦味。私の舌が今まで感じた事のない苦味はきつと、回復薬なんかよりずっと効果のある薬だと思う。死んでもおかしくないくらいの重傷の筈の私

がこうして、動いていられるのだから。

また助けられちゃったみたい。ハンターさ　……アルトアさんに。

手を動かした拍子に、コン、と骨とは違う何かがぶつかる音がした。音のした方に目をやると、そこには鳥の巣のような柔らかそうな木の切れ端が重なって出来た、籠のような物があつた。その中には、ぎっしりと詰められた大人の男の人の手の平くらいの大きさの卵、卵、卵。

そういえば、“コレ”を採りに来たんだっけ。

ただ卵を採りに来たただけだったのに、私は一端のハンターのように、さつきはリオレイアと生死のやりとりをしていた。…何だが、信じられない。戦っていたのはついさっきの出来事の筈なのに、それが何時間も前の出来事のように感じる。ううん、そもそもそれが現実だったかどうかさえ、怪しく思う。リオレイアなんて飛竜と戦ったなんていうのは、夢の中での出来事なんじゃないだろうか。私は今、悪い夢を見ているんじゃないんだろうか。

だけど今のこの時間と幻のような記憶が現実であるという事は、私の身体に刻み付けられた大きな傷と痛みが証明していた。

すぐ近くから聞こえるリオレイアの低い泣き声も、剣が何かにぶつかるような甲高い音も、ドシンドシンという地響きも、小さくだけ聞こえるあの人の荒い吐息も　全て、全て現実だ。

悲鳴を上げる身体に鞭を打ち、私は少しだけ上半身を持ち上げて、状況を把握しようとする。緑色の巨体と、青色の装備の剣士の姿が私の目に映った。てっきりアルトアさんがリオレイアを押している

と思っていたんだけど、ちょっと状況が違っみたいだった。

アルトアさんが、押されている……ように見える。……ううん、それとは、少し違う？

リオレイアが火の玉で焼き尽くそうとしても、突進で押し潰そうとしても、アルトアさんは間一髪のところまで回避し、時折辛そうに顔を引き攣らせる。避けた瞬間に攻撃に転じるかと思いきや、攻撃には移らずにリオレイアの次の攻撃に備える……そんな感じ。リオレウスを相手にしていた時のような勢いも迫力もない。何かが、おかしかった。

助けなきゃいけない。力にならなきゃいけない。

でも、だからと言って、私に出来る事って何だろう。

がむしゃらに矢を放ったところで、硬い甲殻に傷一つくらいしか付けられない以上、リオレイアの気を引かせる事にしかない。気が私に向いてしまったら最期、まだ満足に動く事も出来ない私はどうする事も出来ず、今度こそ食べられてしまう。そんな事、私自身も、私を助けてくれたアルトアさんもきつと望んでない。

上半身を持ち上げているのが辛くなって、私はぶはあと息を吐き出しながら再び地面に仰向けになった。傷口がじんじんと傷む……重傷の筈なのにじんじんと痛む程度しか感じないのが、本当に不思議だった。

でも……それでも、何もしない訳にはいかない。

よっ、ともう一度上半身を持ち上げ、手を背中へと伸ばし、ハンターボウを固定具から取り外す。持ち運び易いように折りたたまれた弓を伸ばし、先から先へとゆっくりと視線を送り、弓を握る左手

に力を込め、目を閉じる。

お願い、私に最後の力を…………。

力…………。

リオレイアの両の目を射抜く力をつ！！

目を開き、右手に二本の矢を握り締めると同時に立ち上がり、ハンターボウを構える。身を屈めるべきなんだろうけど、攻撃する以上どちらにしろ気付かれる。それなら立っている方が狙いを定めやすい。

二本の矢の羽根の辺りの“箆”<sup>へら</sup>をいつものように力強く右手の指に挟み、矢の“箆”<sup>はず</sup>を弓の弦に挟む。そしてハンターボウにある二つの溝に、それぞれの矢をセットした。

一度深く呼吸した後、矢をゆっくりと、ゆっくりと引き始める。

二本同時に放つのは初めてだから、初めて感じるいつもとは少し異なる弓のしなり、弦の張力、手の感覚。だけど、もっと上の“アーチャー”さんは4本も5本も同時に矢を放つ事が出来るんだ。二本くらいなら、私にだって出来る　ううん、やってみせる！

ある程度矢を引いたところで、私は弓を持つ左手と矢を持つ右手を、同時に右へ90度手首を返した。ハンターボウが地面に対して

水平になる。この弓には縦に矢をセットする溝が2つ並んでいるから、横に並んでいる目を同時に射抜くにはこうするしかない。

私は更に矢を引く。

弦の張力が更に強くなる。

矢を支えるのがどんどん辛くなり、右腕の筋肉が悲鳴を上げ、手が震え始める。

また血が吹き出すんじゃないかと思うくらい、傷口が痛む。

貧血なんじゃないかと思うくらい、眩暈がする。

歯を食いしばり、照準をリオレイアの後頭部に向け、私はその時を待つ。

そして。

私は矢を。

……放った！

×××

リオレイアの火球を回避しようとして飛び込み、火球が地面に衝突して炸裂する轟音がすると同時に俺はまた素早く立ち上がり、リオレイアの次の攻撃に備える。

……一体、何分くらいこんなやりとりをしているのだろう。せめて瀕死だった少女がこの巣から逃げ出している事を確認出来るなら俺も一旦退く事が出来るのだが、今の俺には目の前の標的以外に視線を逸らせる程の余裕はない。

さっきまで倒れていたところに少女がいない事を考えると自らの足で立ち上がり移動したのだろう。可能性としては巣の外へ出た可能性が高い。しかし、いる筈のところにいないからと言って、そう決め付けるのは早計だ。そこにいないだけで、巣の外へ出ようとしたが巣の中の何処かで力尽きて倒れていたとしたら……俺がこの場を離れた瞬間、リオレイアの餌食になってしまう。

せめて、巢全体を見渡せる余裕があれば……っ！

リオレイアの口からは相変わらず火が時折吹き出る。未だキレている、という事だ。せめて動きがもう少しゆっくりになってくれ



ば……。

チラリ、と横目で少女の姿を確認しようとしたのとはほぼ同時に、俺の耳に聞こえる再び奴が空気を吸い込む音。……本当に一瞬の油断も許されない。

俺はリオレイアの姿を見ようともせず、横目で見た方向へとまた飛び込んだ。轟音が再び巢に木霊する。

いい加減、延々とこんなやりとりをしても埒が明かない。何か打開策はない物かと考えながら立ち上がった。

丁度その時だった。

ビュン！！

俺の頭上から風切り音がした。二本の、矢だ。それを確認出来たのとはほぼ同時に、ズン、と音を立てて、一本の矢が俺の方へ向き直ったリオレイアの左目に直撃した。もう一本の矢はリオレイアには当たる事もなく更に遠くへ飛び、やがてカン、という音と共に壁にぶつかって落ちた。

リオレイアが左目から血を撒き散らせながら奇声を上げる。少しの間は悶えているだろうと踏み、俺は後ろを振り返った。

俺がいるところから10メートルは離れたところにある2メートルくらいの段差の上、骨や卵が散乱しているその上に、ハンターボウを手に行っている少女の姿が見えた。一本は外したとは言え大した腕だ。あの離れた場所からリオレイアの目を狙い、命中させるとは、どうやら“いにしえの秘薬”が効いたらしいが、少女のその表情からは苦痛を我慢しているように見える。他にも焦り、困惑などがその表情から読み取れた。

無事で何よりだと言いたところだが、今の俺の右腕では武器を振るえない以上、俺が望むのは前進ではなく後退だ。その為には二

人同時に巢を出る必要がある。少なくとも少女を先に逃がさねば。

「……っ、一旦退くぞ！ 身体が動くのなら出口に向かって走れ！」

少女の方へ叫ぶと、俺はリオレイアへと向き直り、じりじりと後ずさる。左目から“血の涙”を流しているリオレイアはようやく落ち着きを取り戻し始めたらしく、息遣いや行動が徐々にゆっくりとなっている。

返事がない事に違和感を覚え、四、五歩くらい奴を睨みながら後ずさったところで、俺は再び少女の方へ振り返った。

「な……っ！？」

思わず口に出してしまった。

段差の上には、ハンターボウしかなかった。

少女の身体は段差から落ち、俺と同じ地面の上にうつ伏せに倒れていた。倒れたまま、ピクリとも動かない。その理由は考える間もない。重傷の身で矢を放つなど、無理をし過ぎたのだ。

……阿呆が。気が付いた時点で俺に構わず巢から逃げ出してれば良かったモノを。これで真正銘、絶体絶命ではないか！

振り返るとリオレイアが突進を仕掛けるべく両足で交互に二、三度地面を踏み鳴らす。その視線の先には俺ではなく、あの少女の姿があった。すぐ目の前の俺ではなく、自らの左目を奪った少女を標的としたのだ。

全身に鳥肌が立ち、背筋に悪寒が走り、口の中が突然カラカラに

乾く。頭の中に鳴り響く“危険”という緊急信号に、瞬時にどの行動が最善であるかを考えるが、こんな時に思い浮かぶのは決まって最善ではない。

とにかく、俺は叫ぶ事にした。

「起きろおおおおおおおつ！！！」

勿論、ただ少女の方へ向かって叫ぶだけではなく、何とかリオレイアの攻撃に備える為に左手に握られたジャツジメントの柄に、右手を添える。一度右手で柄を握ってみるが、やはり上手く力が入らず、代わりに右腕に電流が流れた。…やはり、駄目のようだ。

少女は起き上がるどころかやはりピクリともしない。そしてリオレイアがその少女に向かって、大きな一歩を踏み出す。

だが勿論リオレイアと少女との一直線の間には俺がいる。

そして俺も、ただその巨体に押し潰されはしない！

「うおおおおあああああああつ！！！」

両手でジャツジメントの柄を思いっきり握り締める。右腕に走る激痛に、歯を食い縛って耐えながら。

剣士である以上、突進中のモンスターに攻撃する事など不可能に近い。だが、走り出した直後ならば話は別だ。狙うは一点 巨体を支える二本の足のみ！

リオレイアが二歩目を踏み出したのと同時に、俺はジャツジメントを地面に水平になるように構え、右足を大きく右へと踏み出し、身体を右へと捻った。そして踏み出した右足を軸として、そのまま身体を大きく一回転させた。視界が一周し、それにコンマ数秒の時間差の後、遠心力という力を付けたジャツジメントが奴の足に向か

って薙ぎ払われた。

リオレイアの三歩目を踏み出した左足がジャツジメントと衝突する。交差する二つのエネルギーが双方の衝撃を倍化させる。俺の相棒の刃は足の甲殻を破壊し、深々と足に突き刺さった。足をぶった切れる程の勢いだっただが、それ以上は俺の右腕が持たなかった。

俺の手からジャツジメントが離れ、リオレイアに蹴飛ばされる形で地面に転げ落ちた。

リオレイアは突進の勢いが余ってしまった時のように、大きく土埃を上げながら転倒する。左足からは鮮血を吹き散らしているものの、やはり切断には至っていない。だが、骨まで抉った感触がこの手にあつた以上、奴もそう簡単には動けまい。

重傷なのは、少女やリオレイアだけではない。俺の右肩の一部の筋肉は完全に切れてしまったのかもしれない。

今はもう、だらんと右腕を垂らしているだけでも痛む。装備が邪魔で患部を見る事は出来ないが、恐らく赤く腫れ上がっているだろう。……いや、もしかしたら内出血で醜い班点が浮かび上がっているのかもしれない。

とにかくこれ以上の戦闘は避けたい。これ以上右肩を使うと完全に右肩がイカれてしまう。

俺は地面でもがくりオレイアにも落ちている相棒にも目もくれず、少女の元へと走った。

少女はさつきと同じようにぐったりとし、俺が左手で上半身を持ち上げてても反応はない。完全に意識を失っている。たださつきと違って血色が良い。重傷の身には違わないが、そんな状態から弓を放てるなど、命に別状はもうないだろう。

……これほどまでとは。さすが“いにしえの秘薬”と呼ばれる事だけはあつた。その効能……侮れない。

ズシン！

「な……に……っ！？」

少女を揺さぶり起こそうとしたのと同時に聞こえた、何か大きな生物が地面を踏み締める音。ドクン、と心臓の鼓動が高鳴る。

慌てて振り返ると、そこには完全にキレた目で俺を睨む、リオレイアがいた。……両足で、立ち上がって。

読み誤つた。あの足で立ち上がれるだと……っ！？

武器はリオレイアのすぐ目の前に落ちてゐる。取りに行く余裕はない。第一、武器を手にしたところで、さっきみたいな真似はもう出来ない。よしんば出来たとしても、攻撃力など皆無に等しく、甲殻に傷を一つ付けるのが精一杯だろう。

リオレイアの口から火が漏れる。間違いない、火球を吐き出そうとしているのだ。

……結局、状況は同じだ。大ピンチって事には変わらない。いや、リオレイアの標的が一箇所に集まっている以上、状況はさっきより悪い。……最悪だ。

せめて少女が目覚まし、自らの足で立つてくれれば。

リオレイアが息を吸い込みながら一旦その大口を天井に向ける。その瞬間、突然リオレイアの左足がガクンと折れた。あの一撃は無駄ではなかつたようだ。前のめりに倒れ、衝撃に巣全体が空気を震

わせる。

最後の好機だ。どうせ後退出来ないのなら、前進するしかない！

最後の生と死を賭けたカード。ジョーカーを切るのは俺の役目。

ここで敗れるようならば所詮、俺はそこまでの男だという事。

俺は、少女の上半身をやや乱暴に地面に置くと共に、リオレイアに向けて地面を蹴った。手に、何も持たずに。

地面に突っ伏した今のリオレイアの状態ならば、“アレ”に攻撃を当てる事が出来る。狙いはそれ一点。次の行動など考えず、今はこの一撃に全神経を集中させる。

リオレイアの顔の前まで来たところで、俺は左足を大きく前方に踏み出し、それを軸として身体を右に回転させる。同時に右足を持ち上げ、軽くその膝を曲げる。

回転した視界が再び緑色の巨体を映した。リオレイアが俺を噛み砕くべくその大口を開こうとしている。だが、俺はそれよりも早く“ソレ” 左目に突き刺さったままの矢に向けて“廻し蹴り”を放った。

「ギヤアアアアアッ！！」

眼球を貫通する程度の威力しかなく、そこで止まっていた矢を蹴足によって更に押し込む。眼球の奥にあるのは脳だ。脳に大きなダメージを与える事が出来たなら、どんな生物だろうと致命傷は免れない。

グリップ越しに右足に伝わる肉を挟む感触が新しい。止まっていた左目から血が再び溢れ、血飛沫を上げる。矢が更に奥まで突き刺さり、リオレイアの悲鳴が掠れたような途切れ途切れの声になる。無意味に口を開いては閉じている奴の右目からは、光が失われつつあった。

「生憎、ここぞという場面の賭けには負けた事がないのでな」

一旦、両足で地面に立ち、三步程後ろへ下がる。

勝利を確信した俺の口元が自然と笑みを作る。そして、俺の足がとどめの一撃を繰り出した。

「終わりだっ！」

矢へと放った最後の一撃は、長く大きな矢尻を全てリオレイアの眼球の奥へと埋め込んだ。

×××

防具に守られている筈の背中から腰に掛けて、妙に風を感じる。ひんやりとした空気のせいかな、私の鼻が突然ムズムズして。

「つくしゅん！」

おっと？ ああ、アルトアさんか。

な。私、結局あまり役に立たなかったなあ……。リオレイアの両目を射抜こうとしても一本は外れるし、矢を放った後は眩暈がして、段差から落ちるところまでしか記憶にないし。

倒れている事を初めて知った。目に映る景色はやっぱり薄暗い洞窟なんだけど、目を動かすと倒れたままピクリともしないリオレイアとリオレイアの姿、そして洞窟の中央で差す陽の光に逆らうようにモクモクと昇っていく白い煙が見えた。

上からのアルトAさんの優しい感じの声。普通なら「うん」とか、それを肯定する言葉を発すべきなんだろうけど、私の口はまず、この身体が最も感じてる事を呟いていた。

「すまない、すぐに戻す」

私は慌てて立ち上がると同時にアルトアさんに向き直り、一歩程後ろへ後ずさった。



「まあ落ち着け」

「これってセクハラじゃないですかあ!？」

私の手が必死になって際どく捲れ上がったボーンメールとボーン  
フォールド、そしてその下のインナーを元に戻す。これがこうなっ  
ている理由は一つしかない。

「前の方」はまだ診ていないんだがな」

「まだ……って事はこれから……? 嫌あつ! アルトアさんのエ  
ツチ! バカ! ヘンタイ!」

「……勝手に少し脱がせたのは悪かった。だが、傷口以外は極力見  
ないように とうより俺は応急処置しただけだ。どちらかと言  
うと感謝されるべき行為だと思うのだが」

そう言われてみると、背中 of 傷にヒリヒリヒリと気絶する前には  
なかった痛みがある。この痛みは慣れる程経験してる。…傷を消毒  
した時の痛み。正確に言うとうと消毒した後の痛み。薬を塗った直後、  
薬が傷に染みていく痛みは…言葉に例える事が出来ないくらい、辛  
い。

真っ赤になった顔が、更に赤くなるのを感じる。私ってばまた、  
勢いで恥ずかしい事を口走っちゃった。

「あの、その……ごめんなさい。何度も助けて頂いた恩人に、バカ  
だなんて……」

「他の言葉は訂正しないんだな……まあいい。とにかく、前の傷も  
消毒しておいた方がいい。……リオレイアに噛み付かれたんだ、妙  
な細菌が身体に入り込んでしまってるかもしれない」

「えええっ!？」

「最も、もう手遅れかもしれんが」

そう言つてアルトアさんが差し出した白いボトルを引つ手繰るよ  
うに受け取り、慌てて広げた掌に向けてボトルを傾けて、中の液体  
を出す。掌に溜まつた透明のサラサラの液体をそのまま、お腹の傷  
へと擦り付ける。

瞬間、

「……………いいゝゝゝっ!!」

と傷に染みる痛みと共に、歯を食い縛つた口から情けない声が出  
る。つくうー、染みるー!

痛みに悶えている私を見ながら、アルトアさんが呟く。

「そう言えば、君の名前は？」

きよとん、と私は目を丸くした。

「君の名前。君は俺の名前を知っているのに、俺は君の名前を知ら  
ない。少しだけ、不公平に思つたものでな」

名前……まだ教えてなかったっけ。もしかしたらアルトアさんは  
私の名前を呼びたくて呼びたくて仕方ないって衝動に、戦闘中に駆  
られたのかな。

私の名前は……………。

「ミアン」ジュルグって言います。改めて、宜しくお願いしますね」

そう答える私の視界が涙で少し滲む。それくらい、辛い。

「本来、そういう挨拶は狩りの前にするものだがな。…………とりあえ

ず名前は覚えておく、ミアン。機会があれば、共に依頼を受ける事もあるだろうしな」

「私はまだまだ半人前なので、先の話になりそうですけどね……」

無理矢理に笑顔を作って見せる。

「そうでもない。君の弓の腕前は見事だった。リオレイアの目を同時に狙うなんて芸当、友人の弓使いでも簡単には出来ないだろう。惜しくも一本は外れてしまったが一本だけでも命中させるなど、大したものだ」

「い、いやあー、それほどでもお」

面と向かって褒められると照れる。かと言って傷の痛みが和らぐ訳じゃないので、私の顔はまだ苦痛に顔を歪めている。照れたような笑いを隠すように右の方へと向いた私は、さっき白い煙を吐いていた筒状の物体に興味を持った。……教官に教わった事がある。あれは確か、依頼を完遂した時や負傷して動けなくなった時に村へ向かって合図を送る。

「発煙筒を見るのは初めてか？」

私はそんなに物珍しそうな顔をしていたんだろうか。アルトアさんは続ける。

「とりあえず、村の連中がリオレイアとリオレウスを回収に来るにはもう少し時間が掛かる。それぞれの甲殻でも剥ぎ取っておけばいい」

「アルトアさんはもう剥ぎ取ったんですか？」

「いや、今は少し右腕を痛めててな。回収が終わってから、後で連中からもらつさ」

「……私も、その……もらってもいいんですか？」

「君にはその権利がある。売るにしろ武具の生産や強化に使うにしろ、卵と比べても負けず劣らずの物だと思うが、どうだろう」

卵！ その単語を聞いて私は再び、この森丘に来た理由を思い出した。そう、“飛竜の卵”を採りに来たんだった！

私はアルトアさんの言葉を返さずに、リオレイアに向かって矢を放った段差へと歩き、登る。身体を動かすとやっぱり傷が痛むけど、我慢出来ない程の痛みじゃない。……あんなバカデカイ飛竜に噛み付かれてよくこんなにピンピンしてられるなんて、本当に本っ当に不思議だ。

段差を登り切ると、そこには鳥の巣のような場所に、大量の卵がさつきと同じように所狭しと並んでいた。掌サイズの小さな小さな卵だけど、それは間違いなく“飛竜の卵”だ！最初に運搬した大きな卵を持って帰る事が出来なかったのは残念だったけど、これだけあれば大量のお金に換えてくれる筈！ いやっほーう！

「ねえねえアルトアさん！ これだけ“飛竜の卵”を持って帰ったらどれくらいのお金になるかな！？」

両手に一つずつしりと重量のある卵を持ち、下にいるアルトアさんに問いかける。

アルトアさんの姿は段差の陰になって見えない。だけど溜息を一つ吐いたのが聞こえた。

「やはり、か。まあそれに関しては最初から気付いていたから構わんが……」

やはり？ ……あ！ 兄の病気の為に卵がいるって話だったんだ

っけ！ お金とか言っちゃったなあ、失敗したなあ……。  
言い訳がましく、私はまた口を開く。

「い、いやぁこれだけあるんなら兄の為に卵を一つ持って帰って、  
後の卵は全部売っちゃってもいいかなあーなんて思っちゃったりな  
んかして！」

「母親、弟、そして兄、か。何でもいいが、一つだけ言っておきた  
い事がある」

「何ですか？」

私は恍惚として両手の卵と、大量の卵を交互に見ながら言った。  
お金が入ったらどんな装備やアイテムを買おうかなあーと、頭の中  
はそればかりだった。

だから、アルトアさんの次の言葉を聞いた時、私は ……。

「残念ながら、それは“飛竜の卵”ではなく“鳥竜の卵”

つまりランポスの卵だ。そんな物持ち帰ったところで、二束三文に  
もならん」

手を滑らせて、右手に持っていた卵を落とした。グチャッ、と音  
がして卵は私の足元で弾け、中の液体が遠慮なく私の足に掛かった。

……暫くの間、私は呆然と何も言葉を口にする事もなく、足元に  
弾けて曝け出された黄色くて丸い、まるでお月様のような黄身を見  
つめていた。

ただ、呆然と。

ただただ、呆然と。

……もっと早く言っておきたいよぉ……。……。

更に暫くして、私はやっと、掠れるような声でアハハと笑った。

玄人の俺と素人の私    F i n

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7226m/>

---

玄人の俺と素人の私 from モンスターハンター

2010年10月14日13時02分発行